

発話に伴う身ぶり

－ 自由な会話場面の観察－

古 本 裕 子

1 はじめに

本研究は、自由な会話場面における発話と身ぶり¹の関係を調べ、イメージを表す身ぶり²の中に、言葉以上の情報を伝えようとしている身ぶり、それほど情報を担っていない身ぶりとがあることを示す。最近の身ぶり研究では、人間の認知過程から発話と身ぶりがどのようにして産出されるかについて議論がなされ、いくつかのモデルが提出されている。喜多（2002）の提出したモデルは、話者にタスクを課した場面での観察であるため、前者の身ぶりが強調されているが、自由な会話場面では、後者の身ぶりも出現することを示す。

2 先行研究

発話に随伴する身ぶりの研究では、それぞれの研究者がいろいろな分類法と分類名を提出している（古本 2001）。また、身ぶりの産出モデルも数多く出されている（例えば、Feyereisen ら1991、McNeill 1987, 1992、Rime & Schiaratura 1991）。そこでは発話と身ぶりと人間の認知過程とが、どのような関係を持っているかが議論されている。

McNeill（1987, 1992）は、言葉も身振りも単一の過程（process）の二つの段階（stage）から生じている、つまり言葉と身振りは一つのシステムであると強調している。

喜多（2002）は McNeill（1987, 1992）のモデルを土台にして、新しいモデルを提出した。彼は、発話と表象的ジェスチャー³が「からだ的思考」と「分析的思考」という二種類の思考から産み出される（P. 164）という。「からだ的思考」によって扱われる情報は、感覚などから得られた情報を、抽象化せずにそのままアナログ的に表すイメージ的なもので、表象的ジェスチャーと擬音語擬態語のもとになっているという。一方、「分析的思考」は事象をデジタル的に分節化し、その分

¹ 本研究で言う身ぶりとは、会話するときに自然に出現する体の動きのことである。話者が何かを表現しようとしたか、伝達しようとしたかは問題としない。

² 本研究で使用する用語は次の通りである。

(1) イメージを表す身ぶり

- ・エンブレム：身ぶりとそれを表すものとの関係がある程度記号化した身ぶり。
- ・指示：指・手・体の一部を使って物・人・方向などの実物やイメージを指す。
- ・描写：物や人の形や動きを、手や体の動きで模倣する。

(2) イメージを表さない身ぶり

- ・強調の動作・感情表現・偶発動作がある。

³ 喜多の表象的ジェスチャーとは、本稿脚注2の用語を使えば、指示、描写、強調の動作をまとめたものである。エンブレムは含まない。

古 本 裕 子

節化された事象に恣意的なラベルをつけるものであり、擬音語・擬態語以外の発話のもとになるという。そして、二つの思考は表現されるべき事象に関する情報をお互いに調整しながら、発話やジェスチャーに至るとしている。

彼は、アニメーションの再生課題や、幼児が保存課題に挑戦しているときの身ぶりを観察している。そのため身ぶりが「からだ的思考」の部分から発生していることが強調されている可能性がある。

しかし、上記とは違う状況、例えば伝達課題が与えられてはいなくてただ自由に会話をしているときに現れる身ぶりも、同じモデルが適用されるのだろうか。その点についての議論が充分なされているとはいえない。

古本 (2001, 2002) もタスクを与えた場合の観察をしたものであった。そこで、本研究では資料を収集する場面として自由会話を選び、そこに現れる身ぶりと言話との関係を分析する。

3 方 法

大学生・大学院生男女4人ずつが、同性同士のペアになって20分間、自由に会話する。ペアは6組である。その会話場面を、ビデオレコーダーで録画する。会話はテープレコーダーで録音する。会話を書き起こし、そのスクリプトに身ぶりの記録を書き入れた。

4 結果と考察

観察したテープから、身ぶりと言話の関係を分析し、次の場合を抽出する。

1 身ぶりの情報が重要な場合

1.1 「このような」「これぐらい」「こちらへ」などのことばを伴っている場合

1.2 適当なことばが見つからない場合

2 身ぶりの情報がそれほど重要でない場合

2.1 動きがパターン化している場合

2.2 内容を正確に模倣しようとしているのではない場合

2.3 抽象的なイメージのことばに伴って出てくる場合

3 擬態語に伴う身ぶり

4.1 身ぶりの情報が重要な場合（説明モードの身ぶり）

話者は、積極的に身振りによる情報伝達をしようとする場合がある。時として、身ぶりなしには正しく情報が伝わらないことさえある。この場合、話し手はできるだけ詳細な身ぶりをするによって、この情報を伝えようとする。このような身ぶりを仮に説明モードの身ぶりと言うことにする。このような説明モードの身ぶりを見つけるのに次のような指標を用いる。

4.1.1 「このような」「これぐらい」「こちらへ」などのことばを伴っている場合

現場指示の「このような」「これぐらい」「こちらへ」などの指示詞（庵ら2002）がある場合、そ

の発話は言葉だけでは完成していない。これらのことばを発することにより、身ぶりに注目するように聞き手を促している。そして、全部の情報を知るためには身振りを観察するより他になく、身ぶり情報なしには会話は成立しない。例えば、折り紙を折る説明、道順などの説明する場合に多用される。

4.1.2 適当なことばが見つからない場合

話しているものの名前がない場合、動きや形がことばで表しにくい場合、その名前を忘れたり、聞き手がその名前を聞いても分からないような場合に、そのものの形や動きを示して意志を通じさせようとする身ぶりがある。

次の(例1)⁴では、上記の、説明モードの例を挙げる。

JM1は駄菓子屋に置いてあるビンについて説明している。*①で「こんぐらいの」と言って、ビンの大きさを示す。表そうとするものの特徴の一部または全体、およびその動きを手を使って模倣し、イメージをあらわそうとするものである。

*②で「びんになっててさ、上が大きい蓋であくんだけどさ」と言いながら、写真1のように、右手でビンを押さえて、左手で蓋をあけるように手を動かしている。これもこのビンをよりわかりやすく説明するためにビンの蓋をあけるときの行動を模倣している。

この場合、*①も*②もプラスチックの透明なビンを特定する名詞がないため、身ぶりをしてそのものの形やイメージを伝えようとしていることが分かる。その後、「よく竹串にあの酸っぱいイカの足とか入れてあった」と言いながら、竹串に何かを指す身ぶりをする。このとき「刺す」という動詞は発話しないで竹串に刺す身ぶりをして、刺してあるイカのことを表現している。この食べ物もはっきりした名前がなく、その上不完全な発話であるので、この話を理解するには身ぶりの情報は不可欠である。

(例1)

*①

JM1: あのとく、こんぐらいのプラスチックでさ、とうめなはこにはいってて

JM2: あそうでうですか。 うん。

*②

*③

JM1: びんになっててさ、うえがおおきふたであくんだけどさ、よくたけぐしにあのす

JM2: うんうん。

⁴ 例の中で*は身ぶりの出現を示すが、番号を記したものだけ言及する。以下記号は同じ意味。

古 本 裕 子

*④

JM1 : つばいいかのあしとかいれてあった笑、

笑あれ、なんかげつまえのなんだ×××

JM2 : うーん。ふふ笑。

笑・・・・・・たべたことある。

*



写真1



写真2



写真3



写真4

写真1 「こんぐらいの」と言いながら、ビンの大きさと形を示す。

写真2 「びんになっててさ、上が大きいふたで開くんだけどさ」と言いながら、ふたを開ける身ぶりをする。

写真3 「竹串に」と言いながら、竹串にイカを刺す身ぶりをする。

写真4 「入れてあった」と言いながら、ビンに竹串を入れる身ぶりをする。

次の(例2)も、飲み物を入れる容器の名前が分からず、身ぶりで形を示している。*①で、写真5の左の話者JF1は「陶器のビールとか入れるグラスみたいなの」と言っている。しかしその名前が確かでないために手でその形を示そうとして、両手の親指と人差し指で丸い形を作っている。*②は同じ手の形で、それをリズムカルに上下させている。次に*③では*①と同じ身ぶりをしている。

この場合、身ぶり情報がないと会話は成り立たず、この情報は重要である。なぜならば、その形を示すことで相手にその実物を分かってもらうためにしているからである。

(例2)

JF1 : なんか じぶんのほしいものを なんかえらんでしまう。 さいきんほし

JF2 : そうなんですよ。

*①

*②

*

JF1 : いなっと おもっとるものが あの、とう、とうき ででき とうきの ビール

JF2 : うん うん。

*③

JF1 : とかいれる グラスみたいなの。

JF2 : あ、あー。

*



写真 5

以上、いずれの例も身ぶりの発している情報がなければ発話が成立しない説明モードの例を挙げてきた。

喜多(2002)は、「からだ的思考によって扱われる情報は、知覚、感情、空間的認知、運動制御などを介して得られた情報を、抽象化せずに、そのままアナログ的に表すイメージ的なもので」からだ的思考は表象的ジェスチャーと擬音語・擬態語のもとになっているという。ここで説明モードとしてとりあげたジェスチャーは、喜多(2002)が言う「からだ的思考」から発生したジェスチャーと特徴が似ている。

4.2 身ぶりの情報がそれほど重要でない場合(記号モードの身ぶり)

自由な会話場面で観察すると、説明モードの身ぶりとは別の特徴を持つ身ぶりがかなり見られた。

それは、身ぶりの形態が説明モードほど重要でない身ぶりである。発話が明確で、発話だけで意味を通じさせることができるのであるが、身ぶりも同時に現れる場合である。そのような場合の身ぶりは、動きや位置関係を詳細に伝えようとしているのではない。被験者間で共通した身ぶりが現れることも多い。このような身ぶりを仮に記号モードの身ぶりと言うことにする。

記号モードの身ぶりには次のようなものがある。

- 1 動きがパターン化している場合
- 2 内容を正確に模倣しようとしているのではない場合
- 3 抽象的なイメージのことばに伴って出てくる場合

4.2.1 動きがパターン化している場合

ある単語を発話するとき、その単語に関係する動きの部分を取り取って、身ぶりとしてする場合がある。例えば、読書、本を読む、本、勉強する、などの話題のとき共通して、本のページをめくるような身ぶりすることである。

(例4) 写真6の右の話者J F 3は*①でリコーダーと言いながら、笛を吹く身ぶりをした。次に*②でも、アルトリコーダーと言いながら、*①と同じ手の形を上から下へ下ろしてすばやくま

古 本 裕 子

たあげた。これらはリコーダーということばを相手に伝えようとして、笛を吹くという行動をする「キネトグラフ」という分類に入る身ぶりである。

身ぶりをする人は、「リコーダー」「アルトリコーダー」という名前を完全に発話している。また聞き手もその言葉を知らないというサインを出していない。ここでの身ぶりは詳細に表現する必要はなく、リコーダーという単語以上の情報、例えば「このように吹く」というような情報は伝える意志がないと思われる。

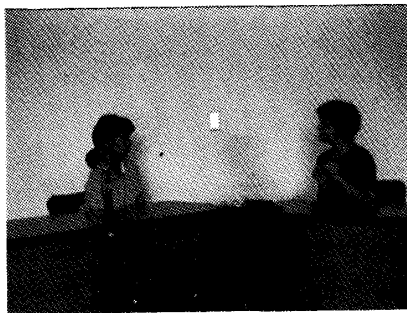


写真 6

(例4)

JF1: うん、うん、うん、うん。

JF3: なんか いっかいめときは うんとあのリコーダー、アルトリコーダー。

*①

*②

次の(例5)では、「カタログ見ても」と言いながら、*①で本を開くような身ぶりをする。しかし、この場合も本を開くという身ぶりはパターン化されており、勉強をする、本を読むというような発話に伴って出てくることが多い。これも、どのように見るかという詳細な情報、例えば速く見ているとか、本の形が大きいとかいう情報を伝えようとする意志はなく、単にカタログを見ると言葉と同じ情報で情報を補強していると考えられる。

(例5)

*

JF1: て うん。 で、ジャスコいったらなくて、で、

JF2: たいへんですよね、しゅふって。

*

*①

*

JF1: つうしんはんばいとかなんかカタログみてもなくて、で、しかたないから

JF2: 笑

以上の例を見ると、「笛をふく」「本を見る」という動作をしたとしてもそれは発話以上に細かく情報を伝える意志はなく、この身ぶりがなければ発話が成立しないというものでもない。もちろん、聞き手が「アルトリコーダー」や「カタログ」が分からなかったとしたら、そのギャップを埋めるため言い直したり、身ぶりも説明モードに切り替えることは可能である。しかし、この身ぶりをしている時点では、説明モードの身ぶりをしようという意志はない。

このような身ぶりに共通するのは、身ぶりがある程度パターン化されていることである。パターン化が進めば、身ぶりが記号としての役割を果たすようになりエンブレムのようにになっていく。本を開く動作や、笛を吹く動作はまだエンブレムと認知されるほどではなく、話者が独自に身ぶりを作り出すことも可能である。しかし、かなりの人が「本を読む」「勉強をする」というような発話をしながら同様の身ぶりをすることが観察されている。

この例から、エンブレムとイメージを表す身ぶりとは、段階的に変化していくものと考えてもよいのではないかとと思われる。

4.2.2 内容を正確に模倣しようとしているのではない場合

次の(例6)の会話でJF2は*①の「駐車場」という部分で両手を下に向け、まるで何かを囲うようにした。また、*②では「別々の場所」と言いながら、先の手と似た形、つまり両手を机から少しあげ、手の平の部分で三角形のような形をつくって示している。*①、*②は駐車場を表す「ピクトグラフ」である。しかし、この場合先の(例3)と違って手の形は駐車スペースを示しているだけで、その正確な形を表そうとしているのではない。身ぶりは、今話している内容、駐車場を指し示しているに過ぎない。例3の例ほど身ぶりの内容の重要度は高くないと思われる。

(例6)

JF1 :

JF2 : あ、うちもいまあれだから、こうじのくるまがちゅうしゃじょうはいつて

*

*①

JF1 :

JF2 : て、そいであ、ちゅうしゃじょうのひとが あの はいれないっていいにくるか

JF1 :

JF2 : ら、そのたびにあのべつのばしょにいれるんだよ。

*②

4.2.3 抽象的なイメージのことばに伴って出てくる場合

次の例は、身ぶりが抽象的な内容を表す場合である。(例7)のスキプトの*①で「お互いに遠慮がある」と発話するとき、JM3は両手を近づけたり、遠ざけたりしている。(写真7)

古 本 裕 子

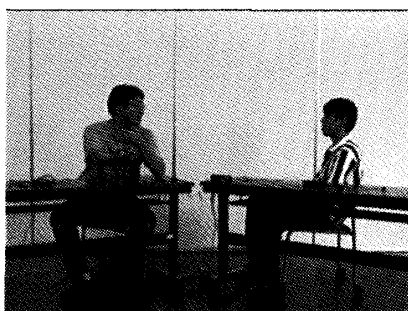


写真 7

次に、*②は「踏み出していけない」と発話しながら、手のひらを軽くにぎって、胸の前の左手を越して前方向へ刻むように手を振っている。

(例7)

*	*①	*②
JM3: なんかこう (1.5) おたがいえんりよがある と	な: なんか	けっきょくこうふみだし
JM4:		うーん。

*

JM3: ていけないほうなんだけども。(0.8)

JM4:

西尾(2001)によると、(例7)の話者が*①でしたような「話者と聞き手の間を往復する身ぶり」は、「お互いに」「やり取り」「話し合う」「関係する」「関係」「親密さ」などの言葉に伴う共通する身ぶりだという。人間関係のように抽象的なイメージは、もともと真似すべき実体が三次元的な空間内にはないのであるから、説明モード的に表せるものではない。それにもかかわらず、これらの言葉に共通するイメージを身ぶりで表そうとしたとき、同じような身ぶりが出現し、それが違う被験者にも共通するとすると、これらはもはや記号に近い機能を持ち始めているといえるのではないか。

4.3 擬態語に伴う身ぶり

(例8)は、擬態語を言いながら身ぶりをした場合である。①で話者は「つるん」と言いながら、右手は指を伸ばして平仮名の「し」の字を書くように、上下に振る。これは今話しているカップの形を表しているのではなく、表面がなめらかで引っかかるところがないことを示している。②では、「もっとこう・・・」と言いながら右手を小さく回すようにしている。しかし言葉が見つからないという状況である。聞き手から「がさがさした」という発話があったので、同意してがさがさしたと言いながら同じ身ぶりをしている。ここでは、表面を手でなでると、少し引っかかるところがあることを示している。

(例 8)

JF1 : ちよっとガサガサって

JF2 : なんか、もっと、なんてのかな、ひょうめんがつるんじゃないくて、もっとこう

*

*①

*②

JF1 : うんうんうん。 そうそうそ。

JF2 : ガサガサってしたかんじの あ、あわを あ、みたことありますよ。あ、あ

ここで、*②の「がさがさ」してというときの身ぶりは、さわったときの様子をそのまま表しており、また、それをうまく表現する言葉が見つからない状態での身ぶりである。このことからこの身ぶりは情報をたくさん伝える説明モードに近いことが推定される。

一方「つるんじゃないくて」というときの身ぶりは、より記号化している。この発話自体が否定の形を取っており、実際にイメージしたものではなく、否定するもののほうを表しているからである。また、「し」の字を書くという非常に単純化された動作で、身ぶりを使って細かく表そうという意志は感じられない。

喜多 (2002) は擬音語・擬態語はすべてジェスチャーのもとになる「からだ的思考」から発しているとしている。ここで、その点について検討することはできないが、上記のように擬態語と言ってもいろいろなレベルがあり、ひとくくりに出来ないということに注目する必要があるだろう。

4.4 説明モードと記号モード

本研究では、言葉に表すことが難しい事柄を身ぶりで詳細に表そうとする説明モードの他に、言葉による情報以上のものを伝えようとしない簡略化されたような記号モードの身ぶりがあることを示した。

しかし、身ぶりによってはどちらのモードかを区別しがたい場合も多かった。説明モードから記号モードまで、その境目ははっきりとした区別がつけられるものではなく、段階的に変化していくものであると予想される。下の表 1 は説明モードと記号モードに注目した身ぶりの分類である。

表 1 説明モードと記号モードに注目した身ぶりの分類

身ぶりのことばの関係	身ぶり	身ぶりの例	身ぶりのモード
<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; transform: rotate(180deg);">言葉が主で 身ぶりは従</div> <div style="writing-mode: vertical-rl; transform: rotate(180deg);">身ぶりが主で 言葉は従</div> </div>	動きや形を詳細に示す	このぐらいの (例 1)	説明 モード
	擬態語	がさがさした (例 8)	
	擬態語	つるんじゃないくて (例 8)	
	抽象的身ぶり	お互いに遠慮 (例 7)	
	パターン化した身ぶり	アルトリコーダー (例 4) カタログ (例 5)	記号 モード
身ぶりが主で、言葉は従	エンブレム	お金 ⁵	

⁵ エンブレムとは、例えば親指と人差し指の先を合わせて○の形を作って、それがお金を意味するような場合を指す。

古 本 裕 子

喜多(2002)は身ぶり全部と擬態語・擬声語はからだ的思考をもとにして発生し、発話は分析的思考をもとに発生していると考えた。喜多のモデルは、アニメーションを再生させる課題をしている途中に得られたものが多く、話し手はストーリーを詳細に語って伝えなければならない状態にあった。そのため、説明モードの身ぶりが多かったと推測される。彼が、本研究で言う記号モードの身ぶりについては言及がない。しかし、本研究でした自由な会話場面での観察では説明モードの身ぶりのほうが少なかった。

いずれにしても、喜多のモデルはマクニールと同様に微小な発生過程を問題にしているため、本研究と同一のレベルで考えることはできないのかもしれない。この点についての議論は次の機会に譲る。

一方、エンブレムについては言葉と同じように記号としての役割がはっきりしているため、独立して論じられることが多い。マクニール、喜多とも分析の対象外である。しかし、記号モードの身ぶりと同じ線上にエンブレムをおいて考えることができるのではないか。話者の自由な選択ができる身ぶりから、段階的に記号化の度合いが進んで、エンブレムにまでいくものと考えられると推論した。

5 まとめ

本研究では、自由に会話する場面で出現する身ぶりを観察して、身ぶりの情報が重要で、より詳しく相手に情報を伝えようとしてなされる説明モードの身ぶり、身ぶり情報がそれほど重要ではなく、ある程度パターン化された記号モードの身ぶりがあることを示した。そして、説明モードから記号モードまで段階的に記号化された身ぶりがあり、エンブレムも同一の線上のものとして考えられる可能性を示した。

<参考文献>

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2002)『日本語文法ハンドブック』
- 喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー 考えるからだ』金子書房
- 斎藤洋典・喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー・行為・意味』共立出版 白川博之 監修 スリーエーネットワーク
- 西尾新(1998)「比喩的身振りに見られるイメージ 認知意味論的考察」『京都大学教育学部紀要』第44号、112-127
- 古本裕子(1997)「ストーリーを語る場面に出現する身ぶり ―接触場面と母語場面の違い―」日本語教育学会発表予稿集
- 古本裕子(2001)「発話に伴う身ぶりについての一考察―ストーリーを語る部分に注目して―」北陸学院短期大学紀要第33号

古本裕子(2002)「発話に伴う身ぶりの観察—フォリナー・トークの観点から見て—」北陸学院短期大学紀要第34号

Feyereisen, P. & de Lannoy J. D. (1991) *Gesture and Speech : Psychological Investigation*. Cambridge University press

McNeill, D. (1992) *Hand and Mind-What Gestures Reveal about Thought-*, The University of Chicago Press

McNeill, D. (1987) *Psycholinguistics : A New Approach*. Harper & Row Publishers, New York.

Rime, B. & Schiaratura, L. (1991) *Gesture and Speech, Fundamentals of Nonverbal Behavior*. Feldman, R. S. & Rime, B. Cambridge University Press 239-281.